

歯医者さん通信『抗血栓療法を受けている場合の歯科受診の注意点』

歯科口腔外科 辻 司 科長

File No. 082

歯医者さん通信

抗血栓療法を受けている場合の

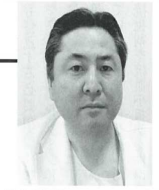
歯科受診の注意点

抜歯など観血的処置で血が止まらなくなる可能性

抗血栓療法を受けている患者さんの歯科受診時の注意点についてご紹介したいと思います。抗血栓療法とは、いわゆる血液サラサラのお薬を服用することを指します。抗血栓療法は、抗血小板療法(動脈血栓の予防)、抗凝固療法(静脈血栓の予防)、線溶療法(血栓溶解療法)の3つに大別されます。この中で、線溶療法とは、一部の急性心筋梗塞や脳梗塞、肺血栓塞栓症など、血栓形成の急性期に注射やカテーテルを用いて行う治療のことを指します。脳神経外科で行うt-PA治療もこれに含まれます。それぞれ対象疾患や薬は、次ページ表にまとめたので参考にしてください。こうした薬剤を服用して

現在が観血的処置を行う場合も抗血栓療法は中断しないのが原則

日本では高齢化率の上昇と共に、抗血栓療法を受ける患者さんは大きく増加しており、抗凝固薬の服用患者さんは約100万人、抗血小板薬の服用患者さんは約600万人と推定されています。こうした抗血栓療法は単独で服用しているだけでなく、例えば、動



解説 辻 司 歯科口腔外科科長
函館中央病院
函館市本町33番2号
☎ 0138 (52) 1231
http://www.chubyou.com/

表1 抗血栓療法と主な抗血栓薬

| 抗血栓療法 | 適 応 | 対象疾患 | 抗血栓薬 |
|--------|---------|------------------------------|--|
| 抗血小板療法 | 動脈血栓の予防 | 心筋梗塞、狭心症、脳梗塞(心原性を除く)、末梢動脈血栓症 | アスピリン、塩酸チクロピジン、硫酸クロピドグレル、ジピリダモール、シロスタゾール、イコサペント酸エチル、塩酸サルボグレラート、トラピジル、ペラプロストナトリウム、リマプロストアルファテクス |
| 抗凝固療法 | 静脈血栓の予防 | 心房細動、心原性脳塞栓症、肺血栓症 | ワルファリンカリウム 非経口:ヘパリン製剤、抗トロンピン剤、ヘパリンイド、合成Xa阻害剤 |
| 線溶療法 | 血栓の早期溶解 | 一部の急性心筋梗塞、脳梗塞、肺血栓症 | t-PA剤(組織型プラスミノゲンアクチベーター)、ウロキナーゼ |

脈血栓と静脈血栓の予防が必要であれば、抗血小板薬と抗凝固薬を併用するということが一般的に行われています。表を参照して頂ければおわかりのように、抗血栓療法ではさまざまな薬が使われています。抗凝固薬

と、致死的な血栓塞栓症疾患が約1%起こるとされたのです。また、抗血小板薬を中断すると、脳梗塞発症のリスクは3.4倍に上昇するといった指摘もあり、薬の中断の見直しが行われるようになりました。

新規経口抗凝固薬の登場

抗凝固療法には新しい薬剤が登場し、新規経口抗凝固薬として許可されたのはNOAC(ノック)です。現在では直接経口抗凝固薬を表す意味でDOAC(ドアク)と呼ばれることがあります。これは簡単に説明すると、間接的な作用で抗凝固作用のあるワルファリンとは異なり、直接凝固作用に働きかける機能を有する薬剤です。

感染性心内膜炎にも注意しなければなりません。感染性心内膜炎とは、心臓の内側の膜である心内膜や弁膜に、病原微生物が繁殖してできる感染症です。弁構造を破壊して弁逆流による心不全を来したり、塊が血流にのって末梢血管を閉塞させる可能性があります。何らかの菌が血液中に侵入することで発症し、抜歯などの観血的処置によって一過性血毒症(細菌が血液中に侵入し体内を循環する状態)が起き、感染性心内膜炎を起こすことがあります。

注するなど、投与方法の目安が決められています。抗凝固療法には新しい薬剤が登場し、新規経口抗凝固薬として許可されたのはNOAC(ノック)です。現在では直接経口抗凝固薬を表す意味でDOAC(ドアク)と呼ばれることがあります。これは簡単に説明すると、間接的な作用で抗凝固作用のあるワルファリンとは異なり、直接凝固作用に働きかける機能を有する薬剤です。

観血的処置を行う際は感染性心内膜炎にも注意

歯科の観血的処置を行う際は、まずは自身の病状や服薬している薬をよく知っておくことが大切です。抗血栓療法を受けている患者さんが、歯科受診の際にはどのようなことに注意すべきか。それにはまず、自分自身がどのような病状で、どのような治療を受けているのか、しっかりと把握しておくことが大切です。そのうえで、自身がどのような歯科処置を受ける予定があり、そこには抜歯や歯石除去など観血的処置があるかないか、また、感染性心内膜炎の予防が必要かどうかを確認しておくことです。

さらには患者さん自身も抗凝固療法に新しい薬剤が登場していることを知っておくことも大切です。治療する側にとっても、医師と歯科の連携をしっかりとすることも重要です。高齢化の加速と共に抗血栓療法を受ける患者さんは増加しておりますが、正しい知識を持って治療に臨めば心配ありませんのでぜひ参考にしてください。

※参考文献「科学的根拠に基づく抗血栓療法実施ガイドライン(第2版)」(2015年)「抗凝固薬治療の患者の管理」